

看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの変化 (第2報)

—保育系短大生との比較による学習効果の相対的特徴—

市 川 正 人*、細 野 恵 子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

【要旨】 本研究の目的は、看護系大学生と保育系短大生のもつ乳幼児に対するイメージを比較することにより、小児看護学領域の学習が乳幼児に対するイメージの形成に与える効果を明らかにすることである。調査は看護系大学生及び保育系短大生を対象に質問紙法にて実施した。質問項目は井上らが子ども観の測定に有効であるとした51組の形容詞対を参考に、独自に7段階の評価尺度を設け、その値を得点とした。調査はそれぞれ専門領域の学習の前後で実施し、Mann-WhitneyのU検定にて分析した。分析の結果、保育系短大生は専門領域の学習によって乳幼児に対するイメージを肯定化する傾向が強く見られたが、看護系大学生はイメージが肯定・否定の双方向に広がっていた。結果より、看護系大学生は幼稚園・保育所演習により乳幼児に対するイメージを肯定化し、臨床実習においてイメージを否定的にも広げているという相対的特徴が示唆された。

キーワード：看護系大学生、保育系短大生、乳幼児のイメージ、学習効果、学科間比較

I. 緒言

看護系大学生は看護や医療の視点から乳幼児について学び、幼稚園・保育所演習や病院での臨床実習を通し、あらゆる健康レベルの乳幼児と接する機会がある。子どもに対するイメージは過去の体験や成育過程の影響を受け、子どもへの接し方や問題解決への取り組み方に影響する(市江1997)といわれており、看護系大学生は演習や実習で実際に乳幼児と接する体験によって、イメージを形成していることが考えられる。第1報では、看護系大学生は小児看護学領域の学習を経て、乳幼児に対するイメージが肯定・否定の双方向に広がる結果が示され、その要因として、幼稚園・保育所演習と病院実習により、あらゆる健康レベルの乳幼児と接した経験が影響していると考察した。

一方、保育系学生は教育・福祉の観点から乳幼児について学んでおり、健康な児と接する機会が多く、看護系大学生に比べ病児と接する機会が少ないと考えられる。そのため、第1報で得られた考察に基づけば、保育系短大生は専門領域の学習により、乳幼児のイメージを肯定化させる学生が多いことが推測される。また、学生の入学時点で横断的に行った著

者の先行研究(2009)では、児童学科の学生は、他学科に比べ乳幼児に対する興味・関心が高く、乳幼児に対し肯定的イメージをもっている傾向が示された。よって本報では、看護系大学生と保育系短大生それぞれ、専門領域の学習前後での乳幼児に対するイメージの変化を比較し、看護系大学生の相対的特徴を明らかにすることにより、小児看護学領域の学習効果について検討したので報告する。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護系大学生と保育系短大生のもつ乳幼児に対するイメージを比較することにより、小児看護学領域の講義、演習および臨地実習が、看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの形成にどのような効果を与えるのかを明らかにし、今後の効果的な教育を展開するための基礎資料とすることである。

III. 研究方法

1. 研究対象

A 大学看護学科学生 47 名および、A 大学短期大学

2010 年 11 月 4 日受付：2011 年 1 月 28 日受理

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : mai@nayoro.ac.jp

部児童学科学生 54 名を対象とした。

2. 調査方法

1回目の調査は専門領域の学習が始まっていない時期である 2008 年 4 月に行った。対象となる学生は、看護学科 3 年次および、児童学科 1 年次である。その後それぞれ専門領域の講義・演習・実習を経て、2回目の調査を 2009 年 11 月～2010 年 1 月に行った(看護学科 4 年次、児童学科 2 年次)。調査は質問紙法にて行い、留置法にて回収した。

3. 質問項目

質問項目は井上ら(1985)が子ども観の測定に有効であるとした 51 組の形容詞対を参考に独自に 7 段階の評価尺度を設け、その値を得点とした。各項目共に「明るい—暗い」など肯定的イメージと否定的イメージの組み合わせによる形容詞対となっている。いずれの項目も、7 点が最も肯定的なイメージ、1 点が最も否定的なイメージとし、その中間の得点を 4 点とした。

4. 分析方法

1) 回答傾向の把握

1 回目・2 回目それぞれの回答の傾向を把握するため、全項目の平均値および各項目の平均値を算出した。またそれぞれの質問項目ごとに得られた平均値を、中間得点の 4 点を基準に「4 点以上の項目」および「4 点未満の項目」に分類し、全項目中の割合を求めた。

2) 専門領域学習前後の比較

専門領域学習前後の比較には、Mann-Whitney の U 検定を用いた(有意水準 5%)。なお分析には SPSS 16.0J for Windows を使用した。

5. 倫理的配慮

研究対象者には研究の趣旨を口頭および文書にて説明し、同意の得られた学生のみ回答を依頼した。研究協力への同意の確認は、質問紙の提出をもって同意があったとみなした。質問紙は無記名で、研究対象者個人が識別されないよう、連結不可能匿名化とした。また、本研究の実施に当たっては、名寄市立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 回収数および回収率

看護学科の 1 回目の調査は、配付数 47、回収数 45、回収率 95.7%、有効回答率 100%、2 回目の調査は、配付数 46、回収数 35、回収率 76.1%、有効回答率 100%であった。児童学科の 1 回目の調査は、配付数 54、回収数 54、回収率 100%、有効回答率 100%、

2 回目の調査は、配付数 54、回収数 51、回収率 94.4%、有効回答率 100%であった。

2. 全項目の回答の平均得点

1) 全項目の平均得点

全項目の平均得点は、看護学科の 1 回目は 4.7、2 回目は 4.7 であった。児童学科の 1 回目は 5.0、2 回目は 5.2 であった。

2) 各項目の平均得点

各項目の平均得点は図 1・2 に示すとおりである。全項目中、肯定的イメージを示す項目(平均得点が 4 点以上)は、看護学科 1 回目 38 項目(74.5%)、同 2 回目 39 項目(76.5%)、児童学科 1 回目 41 項目(80.4%)、同 2 回目 46 項目(90.2%)であった。看護学科では、2 回目の調査でイメージが否定的(4 点未満)から肯定的(4 点以上)に転じた形容詞対は「親切的な—不親切的な」、「きちんとした—だらしない」、「思いやりのある—わがままな」、「まとまった—バラバラな」の 4 項目であった。また、イメージが肯定的から否定的に転じた形容詞対は、「鋭い—鈍い」、「まじめな—ふまじめな」、「勇敢な—臆病な」の 3 項目であった。一方、児童学科では、2 回目の調査でイメージが否定的(4 点未満)から肯定的(4 点以上)に転じた形容詞対は「強い—弱い」、「鋭い—鈍い」、「頼もしい—頼りない」、「たくましい—弱々しい」、「速い—遅い」の 5 項目であった。なお、児童学科ではイメージが肯定的から否定的に転じた形容詞対は無かった。

3. 専門領域の学習前後の比較

1) 各学科の得点傾向に有意差のみられた項目

Mann-Whitney の U 検定を用いて中央値の比較をした結果を表 1 に示す。看護学科で 2 回目の得点が有意に上昇した項目は「強い—弱い」、「親切的な—不親切的な」など 5 項目、有意に下降した項目は「陽気な—陰気な」、「鋭い—鈍い」など 5 項目であった。また、児童学科で 2 回目の得点が有意に上昇した項目は「強い—弱い」、「鋭い—鈍い」など 11 項目、有意に下降した項目は「幸福な—不幸な」、「元気な—疲れた」の 2 項目であった。

V. 考察

看護学科では 5 項目で得点が有意に上昇し、同数の 5 項目で得点が有意に下降していた。一方、児童学科では 11 項目で得点が有意に上昇し、有意に得点が下降した項目は 2 項目のみであり、双方の傾向に大きな差異がみられた。この結果より、保育系学生は専門領域の学習を経て乳幼児に対して肯定的イ

看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの変化（2）

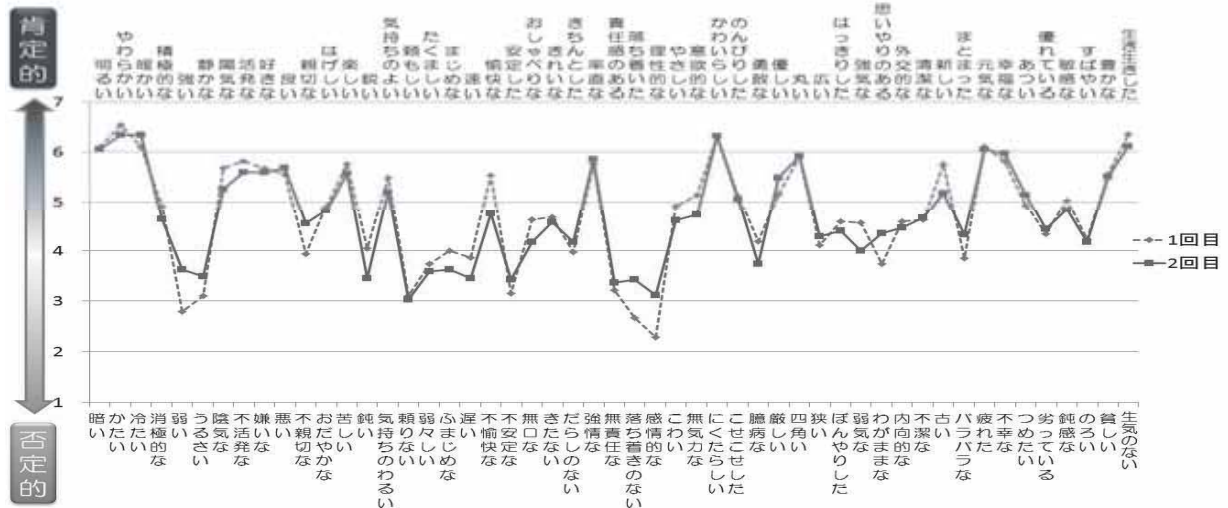


図1 看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージを表す形容詞 51 対の平均値

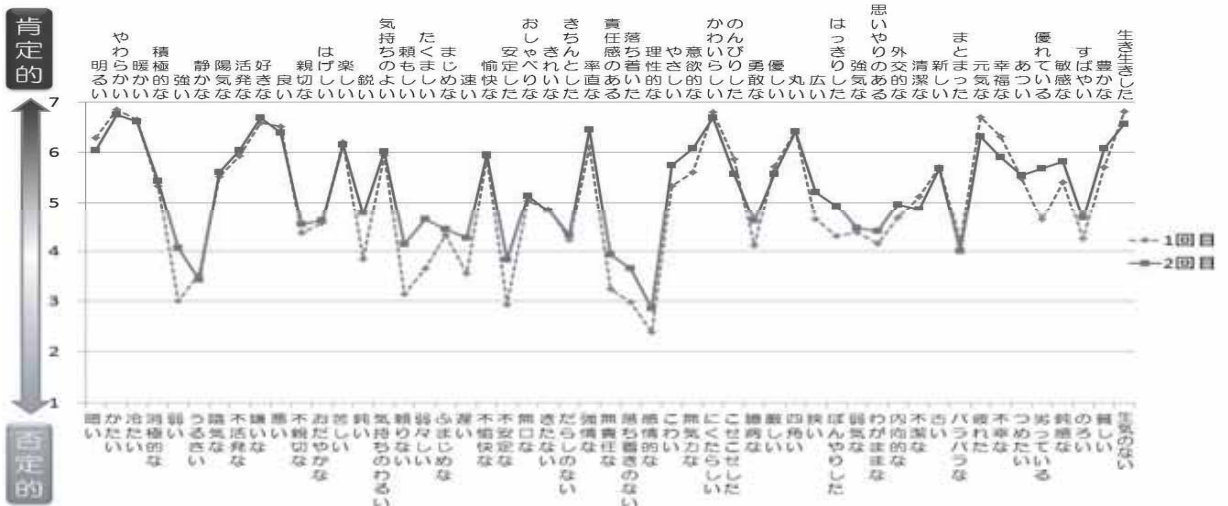


図2 保育系短大生のもつ乳幼児に対するイメージを表す形容詞 51 対の平均値

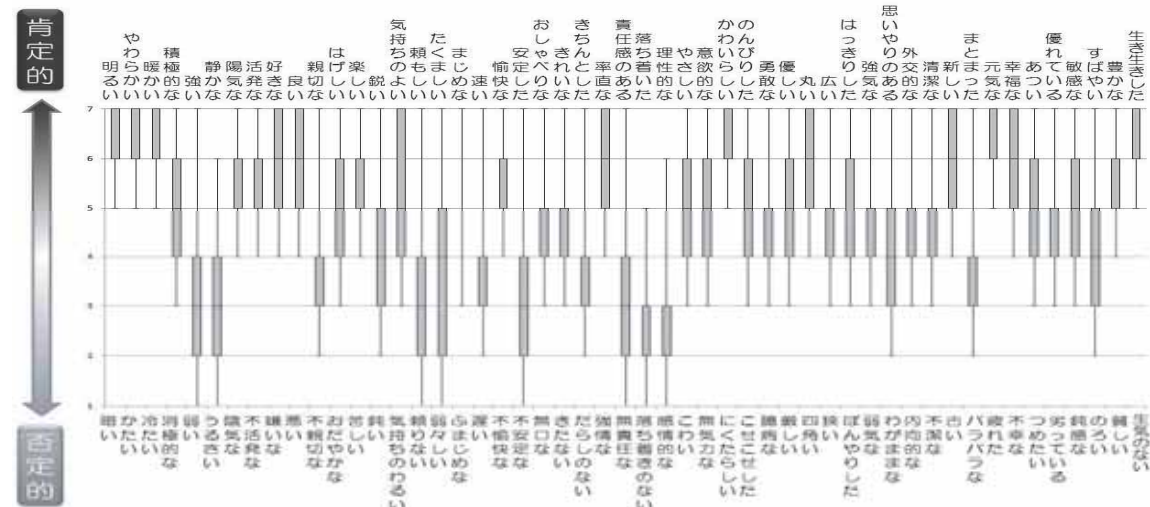


図3 看護系大学生の得点分布（1回目）

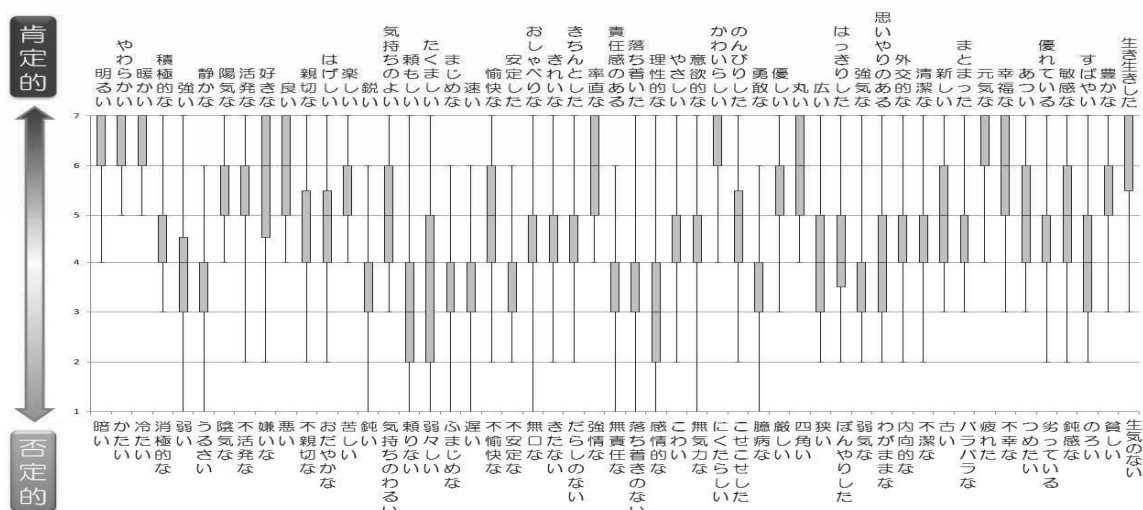


図4 看護系大学生の得点分布(2回目)

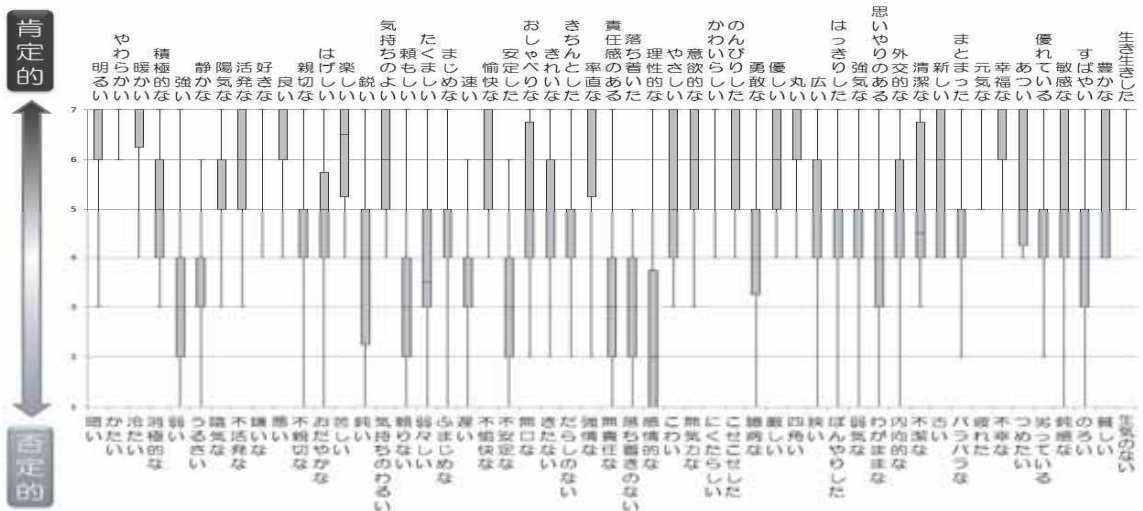


図5 保育系短大生の得点分布（1回目）

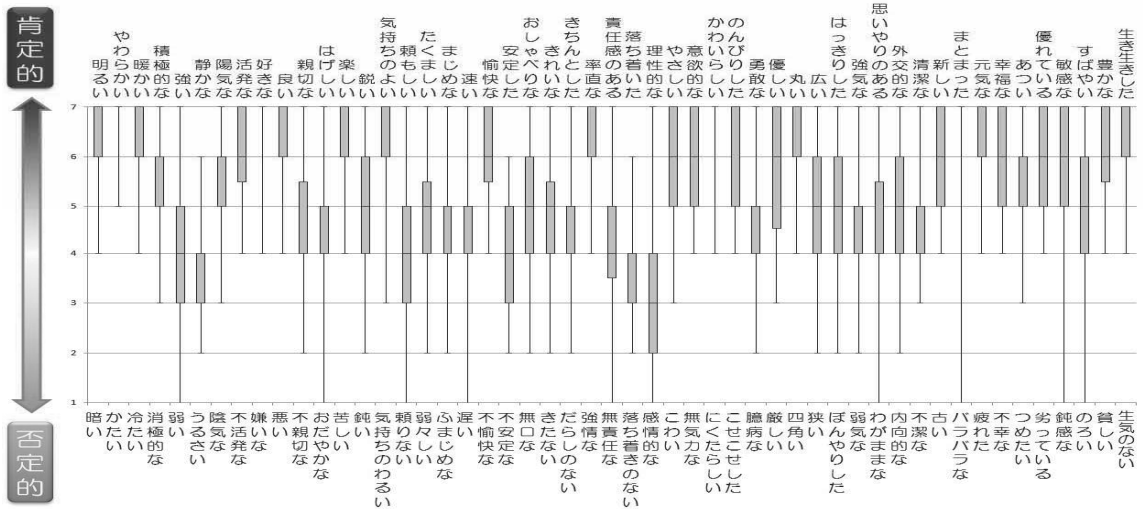


図6 保育系短大生の得点分布（2回目）

表1 専門領域の学習前後の調査で有意差のみられた形容詞対

	2回目の得点が有意に上昇した項目	2回目の得点が有意に下降した項目
看護学科	「強い—弱い」 (p = 0.008)	「陽気な—陰気な」 (p = 0.026)
	「親切的な—不親切的な」 (p = 0.047)	「鋭い—鈍い」 (p = 0.047)
	「落ち着いた—落ち着きのない」 (p = 0.002)	「愉快的な—不愉快的な」 (p = 0.005)
	「理性的な—感情的な」 (p = 0.005)	「強気な—弱気な」 (p = 0.016)
	「まとまった—バラバラな」 (p = 0.034)	「新しい—古い」 (p = 0.025)
児童学科	「強い—弱い」 (p = 0.001)	「元気な—疲れた」 (p = 0.008)
	「鋭い—鈍い」 (p = 0.007)	「幸福な—不幸な」 (p = 0.037)
	「頼もしい—頼りない」 (p = 0.001)	
	「たくましい—弱々しい」 (p = 0.003)	
	「速い—遅い」 (p = 0.013)	
	「安定した—不安定な」 (p = 0.001)	
	「責任感のある—無責任な」 (p = 0.004)	
	「落ち着いた—落ち着きのない」 (p = 0.009)	
	「広い—狭い」 (p = 0.027)	
	「はっきりした—ぼんやりした」 (p = 0.043)	
	「優れている—劣っている」 (p = 0.000)	

Mann-Whitney U 検定

イメージを強めたのに対し、看護系大学生は肯定・否定の双方に広めたという、相対的特徴が示された。保育系学生は、乳幼児について教育・福祉の観点から学び、また幼稚園・保育所等の実習を通じ、健康な乳幼児と接する機会が多い。そのため、「強い—弱い」、「速い—遅い」など、健康で元気のある乳幼児からイメージされるような項目を中心に、乳幼児のイメージもより肯定的なものへと変化したことが考えられる。著者らの先行研究 (2009) では、保育系学生は他学科に比べ、入学時点で既に乳幼児に対し肯定的なイメージをもっている傾向が示されていたが、専門分野の学習を経て、更に肯定的なイメージを強める傾向が示された。

第1報では、看護系大学生の乳幼児に対するイメージが肯定・否定の双方向に広がった結果に対し、肯定的に転じた項目の要因として幼稚園・保育所実習による効果を挙げている。本報において、多くの

幼稚園・保育所での実習を行っている保育系学生が肯定的イメージを強めたという結果が示されたことから、第1報の結果が裏付けられたと考えられる。この結果より、仮に看護系大学生の幼稚園・保育所実習を実施しなかった場合、乳幼児に対する肯定的イメージが損なわれることが懸念される。よって、看護系大学生の幼稚園・保育所実習は、乳幼児に対するイメージの形成において、非常に重要な経験であることが示唆された。一方、看護系大学生と保育系学生のカリキュラム上の違いの一つとして、臨床実習の有無があげられる。看護系大学生に比べ、病児と接する機会の少ないと思われる保育系学生では、否定的に転じたイメージが少ないという結果に反映されていることが考えられる。この点においても、第1報で看護系大学生の乳幼児に対するイメージが否定的に転じた要因として臨床実習による影響を挙げた考察と合致している。

以上より、本報では看護系大学生と保育系学生を比較することにより、第1報の結果を裏付け、また幼稚園・保育所演習および臨床実習が、看護系大学生の乳幼児に対するイメージの形成に重要な効果を挙げていることが示唆された。一方で、保育系学生に対する相対的特徴についての示唆は得られたが、幼稚園・保育所演習や臨床実習など、それぞれの学習効果は考察できていない。そのため、今後は講義、演習、実習それぞれについて、その学習効果を詳細に検討していく必要があると考える。

VI. 結語

本報では、専門領域の学習を経ることにより、保育系短大生は乳幼児に対するイメージを肯定化したのに対し、看護系大学生は乳幼児に対するイメージを肯定・否定の双方向に広げるといった相対的特徴が示された。また、看護系大学生にとって幼稚園・保育所演習が、乳幼児に対し肯定的なイメージの形成に重要な効果をあげていることが示唆された。看護職者はあらゆる健康レベルの対象者を理解していくことが求められる。今後も学生が、乳幼児のみならずあらゆる年齢、健康レベルの対象者に対し理解が深められるよう、学習効果を高める教育を模索していきたいと考える。

文 献

- 市江和子(1997) 小児看護学において看護学生が子どもに対してもつイメージの変化－小児看護学学習の前後におけるイメージ形成要因－. 第28回日本看護学会集録(看護教育), 140-142.
- 市江和子(2001) 看護学生の子どもに対するイメージに関する研究(その1)－看護学生と保育学生の比較－. 日本看護研究学会雑誌 24, 391.
- 市川正人, 細野恵子, 上野美代子(2009) 看護系学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較. 名寄市立大学紀要 3, 87-92.
- 井上正明, 小林利宣(1985) 評価技法としてのSD法の意義とその使い方(その2)－形容詞対の尺度構成の方法－. 指導と評価 31, 41-44.
- 今辻由香里, 山下千波, 中嶋恵美子(1997) 3年過程看護学生の小児看護学講義終了後の学び. 第36回日本看護学会集録(小児看護), 321-323.
- 上山和子(1999) 看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について. 新見公立短期大学紀要 20, 125-133.
- 木村留美子(1992) 子ども観の研究(1)－SD法による

短期大学生の子どものイメージについて－. 日本看護科学会誌 12, 50-56.

草野美根子, 寺田敦子, 今福ひとみ, 福池ゆかり, 杉本暁子, 大久保薫, 酒見敬子, 中淑子, 内海滉(1997) 小児看護実習における看護学生の子どものイメージの変容－病棟実習と保育所実習の因子分析的検討－. 第28回日本看護学会集録(看護教育), 143-145.

高橋紀子, 内海滉(1999) 看護学生の子ども時代の自己像と看護学生の子どもに対するイメージとの関連. 日本看護研究学会雑誌 22, 204.

野村幸子, 河上智香, 長谷典子, 藤原千恵子(2007) 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ. 県立広島大学保健福祉学部誌 7, 169-180.

細野恵子, 上野美代子(2008) 小児看護実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ. 市立名寄短期大学紀要 41, 25-31.

細野恵子, 市川正人, 上野美代子(2009) 看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較. 名寄市立大学紀要 3, 79-86.

Original Paper

Changes in the perception of infants among university nursing students (2)

- A comparison with college childcare students -

Masato ICHIKAWA *, Keiko HOSONO

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

Abstract: The purpose of this study is to compare the images of infants held by university nursing students with those held by college childcare majors with the goal of clarifying the effect of pediatric nursing training on the formation of students' perception of infants. The survey of students was conducted using a questionnaire comprising Inoue et al.'s 51 pairs of adjective opposites determined to be effective in measuring attitudes toward children, each pair item placed on a seven-point scale. The survey was administered before and after study periods for both groups of students and numerical values of responses were analyzed using a Mann-Whitney U test. Results indicated that the college childcare majors overwhelmingly tended to develop a more positive image of infants through their studies, while the university nursing students showed development of both positive and negative images. Such results suggest that the image of infants developed by university nursing students is relative to the type of practical training in which they are engaged, with kindergarten and nursery school practicums fostering positive perceptions and clinical practicums contributing to negative perceptions of infants.

Key words: university nursing students, childcare students, perception of infants, learning effect, comparison between department

Received November 4, 2010; Accepted January 28, 2011

* Corresponding author (E-mail: mai@nayoro.ac.jp)